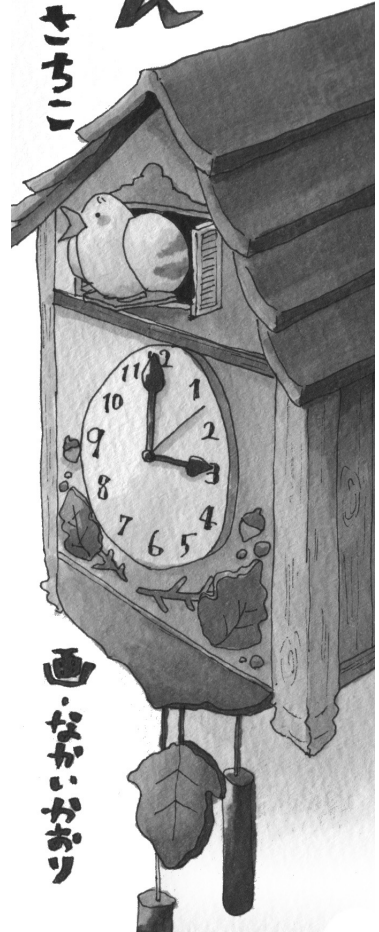


ポロ蔵

十人

作、ななもりささこ



画、なかいがおり

ポロ蔵さんが、山下家にきた時、それはそれは大スターでした。

もみじの赤い葉がまいちる中、ポロ蔵さんは、鳥かごなんかではなく、木ぼり細工のりっぱな家に入って、やってきました。

木ぼりの家の正面には、数字が丸くならんでいて、ぴんとがった針も、二本ついています。数字の「十二」の上には、小さなとびらがありました。

そう、それは、家の形をしたハト時計。ポロ蔵さんは、ハト時計の、木ぼりのハトなのです。

「さあ、どうぞです。いい時計でしょう」

時計屋さんが、山下家の柱に、ハト時計をすえつけたのが、ちょうどきっかりお屋でした。

二本の針が、てっぺんでカチリとあわさって、(よし、行くぞ)

ポロ蔵さんは、胸をそらせてとびだしました。

ポロッポー、ポロッポー！

「おお、いい声だな」

山下家のだんなさんが、ひげをひっぱりながら、ポロ蔵さんを見あげました。

「まあ、かわいい、まっ白なハトだわ」

となりで、山下家の奥さんが手をたたくと、着物の袖の、小菊の柄も、ゆらゆらしました。

ポロ蔵さんが鳴きながら、見わたしたところ、山下家は、小さいながらも、なかなかりっぱな家のようにでした。

ポロッポー、ポロッポー！